

東桜コンピテンシー「①ビジョン」について ～その6～

①「ビジョン」

数年～数十年単位の中長期的な目標として、望ましい社会や理想とする自分の姿を思い描く力。

今回も「FACT FULNESS (ファクトフルネス)」(ハンス・ロスリング他著、日経BP社)について考えてみます。

「先進国」と「発展途上国」という表現で国を分類することがあります。みなさんが想像する「発展途上国」の暮らしぶりはどのような姿でしょうか。例えば、

「5人の子供が、一家に一つしかないプラスチックのバケツを抱え、裸足で数時間かけて歩き、ぬかるみに溜まった泥水を汲んでくる。帰り道で拾った薪で火を焚き、泥混じりのポリッジ(粥)を調理する。生まれてこのかた、口にすることがあるのはこの粥だけ。土地は痩せ細り、不作の月にはお腹を空かせて床に就く。」

といった姿をイメージする人がいるかもしれません。

これは、ハンスさんが所得レベルにより、世界の国々をレベル1～4の4つのグループに分けた中のレベル1の人々の暮らしを表したものです。レベル1とは、1日の収入が1ドルの人たちで、世界におよそ10億人いるそうです。

それでは、レベル2～4の人々はどのような暮らしをしているのでしょうか。

レベル2の人々については、次のように表現しています。

「1日の稼ぎは以前の4倍、4ドルになった。毎日3ドルもおカネが余る。さて、何に使おうか？自分で育てた作物以外にも、たとえば鶏を飼って卵を食べることもできる。少しおカネを貯めれば、子供たちにサンダルも買える。プラスチックのバケツを買い足したり、自転車を手に入れたりすれば、30分で1日分の水を汲んでこられる。灯油のストーブを買えば、子供たちは薪を集めてくる代わりに学校に行ける。電気も通りはじめ、冷蔵庫を使えるほどは安定していないが、停電がない日には電球の明かりで子供たちは宿題ができる。マットレスを買えば、地べたで寝る生活ともおさらばだ。(中略)こういう暮らしをしている人たちは、世界におよそ30億人いる。」

さらに、レベル3の人々については、次のように表現しています。

「仕事を掛け持ち、毎日休みなく16時間働いて、1日の収入がまた4倍の16ドルになった。手元のお金も増えたところで、水道管を引いてみた。これで水を汲んでこなくてもいい。電力の供給も安定し、子供も毎日宿題ができるようになり、買った冷蔵庫も安定して使えるように。食料を保存できるようになり、毎日違うごちそうが食べられる。バイクも買ったので、少しでも給料が良い工場に通えるようになった。(中略)こういう暮らしをしている人たちは、世界におよそ20億人いる。」

最後に、レベル4の人々については、次のように表現しています。

「収入は1日32ドルになり、もはや裕福な消費者だ。1日3ドル余分に稼いでも暮らしに大差はない。極度の貧困に暮らす人たちにとっては、1日3ドルの違いが人生を左右するが、レベル4にいる人はむしろ、3ドルなんてはした金だと思っている。学校には12年以上通い、旅行のときは飛行機に乗る。月に一度は外食し、車を買うこともできる。蛇口からはお湯も出る。

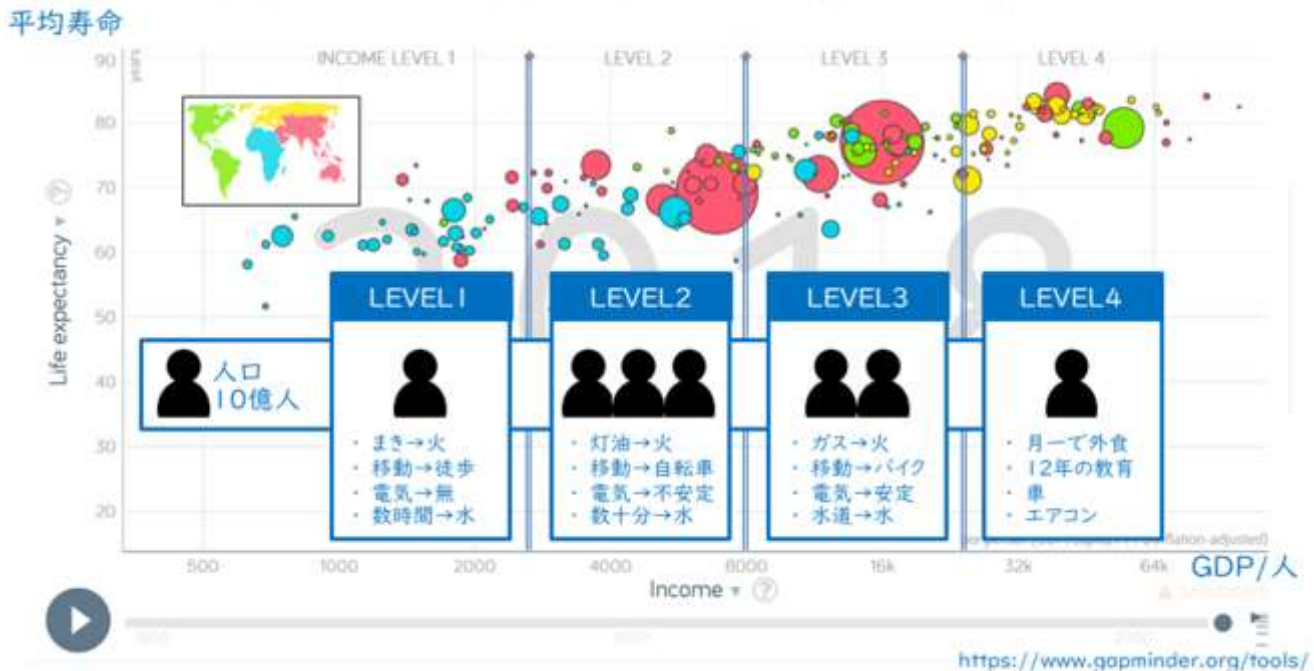
ちなみにこういう暮らしをしている人たちは、世界におよそ10億人いる。

これ以上は説明しなくてもよいだろう。この本を読んでいるあなたは、レベル4の暮らしをしているに違いない。生まれたときからレベル4にいる人には、ほかの3つのレベルがそれぞれ大きく異なることを想像するのは難しい。世界の残り60億人の生活水準を正しく理解するには、相当気をつけないといけない。」

レベル1～4の暮らしびりを読んでどのように感じたでしょうか。「先進国」と「発展途上国」というように、2つのグループだけで括ることはどうも乱暴なようです。

次の図は、横軸に一人あたりのGDP（所得）、縦軸に平均寿命をそれぞれとっています。つまり、上にいくほど健康で、下にいくほど不健康。また、右にいくほど金持ちで左にいくほど貧しいと言えます。また、丸は国を表しており、丸の大きさは人口を表しています。2つのピンク色の大きな丸はインドと中国です。さらに、所得に応じた生活のレベルを1から4に分けて表しています。

4つの所得レベルが必要。世界には2種類以上の暮らしがある。



先に示した図は2018年のものですが、50年以上前の1965年では次の図のようになります。比較してみると、どのようなことがわかるでしょうか。例えば、1965年⇒2018年の間に、全体的に右上に移動していることがわかります。つまり、世界的に見ると、より健康で、経済的にも豊かになっているということです。インドや中国は特に顕著です。

50年以上前は大体2分割出来た。

平均寿命



ハンスさんは、10の本能を挙げて、物事を正しく見る場合に気を付けるべきことを示しています。その一つが「分断本能」です。

「分断本能」とは、物事を対比する2つのグループに分けてしまう（分断してしまう）本能です。2つに分けたそれぞれが対立していればドラマチックですし、ジャーナリストは人間の分断本能に訴えたがるため、人々は分断がないのに分断があると思い込んでしまう傾向があるのだそうです。

ハンスさんは、分断本能を抑えるために、3つの注意すべきポイントがあると述べています。

一つめは、「平均の比較」に注意するということです。

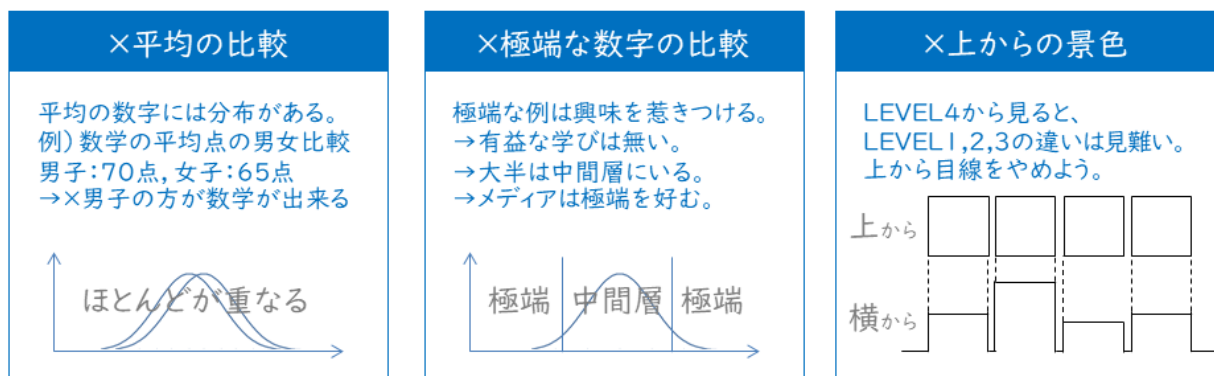
私たちは、データを取り扱う際に「平均」を求め、複数の平均値を比較したりすることがあります。その際に気をつけなければならないのは、情報を単純化すると隠れてしまうことがあるということです。例えば、平均値にするとデータの分布が隠れてしまいます。平均値は異なっても、分布を調べてみると、2つのグループに重なりがあり、分断などないことが多いということです。

二つ目は、「極端な数字の比較」に注意するということです。

極端な数字の比較は、興味を惹きつけるため、メディアも取り上げがちですが、そこに有益な学びはなく、大半は中間層にいるということを忘れてはいけないということです。

例えば、人や国のグループには必ず、最上位層と最下位層が存在します。2つの差が残酷なほど不公平なときもあります。しかし、多くの場合、大半の人や国はその中間の、上でも下でもないところにいるということです。

分断本能を抑えるための3つの注意すべきポイント



大半の人がどこにいるかを探ることが大事。
但し、様々な視点で判断すること。

3つ目は、「**上からの景色**」であることに注意するということです。

これは、高いところから低いところを正確に見るのは難しい。つまり、高いところから低いところを見た場合、実際には違っているのに、どれも同じくらい低く見えてしまうということです。

例えば、レベル4の暮らしをしている私たちは、レベル1～3の違いをきちんと理解するのは難しいということです。それは、自分の原体験のほとんどがレベル4からきているからです。また、それ以外の体験は、非現実的で極端な出来事を好むマスメディアのフィルターを通して得たものだからです。

分断本能を抑えるには、大半の人がどこにいるかを探ることが大切であることを忘れないようにしましょう。

最後に確認します。大切なことは、誤った思い込みを排除し、データを基に世界を正しく見る習慣をつけることです。

(引用・参考文献)

「FACT FULNESS」(ハンス・ロスリング他著、日経BP社)

令和2年(2020年)3月